

現代中国人の「愛国心」に対する再考

－その理想性と現実性をめぐる検討－

東京大学大学院 江暉

1. 目的

近年、中国において日本を含む諸外国に対する抗議デモが頻発し、そこに掲げられている「愛国無罪」というスローガンが目立っており、中国社会におけるナショナリズムの高揚は国際社会に注目されるようになり、とりわけ中国の近隣であるアジア諸国からの批判の声が高まっている。そもそも「愛国心」は愛郷心的な心情と異なり、自然に生まれてくるものではないと指摘され、愛国心の担い手としての国民に国民意識を自覚させるには中心的な役割を担うのが教育であるといわれている。中国人が抱えている「愛国心」についても「愛国主義教育」によって「創成」されたものであるとの見解が多い。この意味で、「愛国心」は一種無条件の、理想化された愛着と捉えられる。しかし一方、愛国心の主体となる国民国家（ネーション）とは虚構の概念ではあるが、現実社会と完全に切り離すことができず、「愛国心」は現実に対する認識に影響される可能性が考えられる。では中国人の「愛国心」において、現実認識に基づいて築かれた部分が存在するだろうか。即ち、中国人にとっての「愛国」は理想的、それとも現実的な次元で語られているのか、本研究はこの根本的な問いから出発することによって、現代中国社会におけるナショナリズムの実体を新たに見直す視点を提示したい。

2. 方法

本研究は2012年5月から6月にかけて中国全土の7地域（東北、華北、華東、華南、華中、西南、西北）の7都市で実施したアンケート調査（ランダムロケーションサンプリング法で回収、有効回収数は一般サンプル1,152、大学生サンプル877である）の結果を用いて実証的考察を行う。具体的に、調査回答者の自分自身の現実生活に対する評価（「生活満足度」尺度、9問）及び祖国中国・中国政府に対する評価（「自国評価」尺度、7問）、「愛国心」尺度（6問）の三者の関連性を明らかにすることにより、中国人が抱く「愛国心」の現実性を検討する。

3. 結果及び結論

年代別に考察した結果によると、大学生サンプルと60歳以上の高齢者サンプルが同様な傾向を示しており、興味深い結果を得た。彼らは自分自身の生活に満足しているものの、中国社会や中国政府を厳しく評価している。しかしそれにもかかわらず、他のサンプル群に比べて愛国心得点が際立って高かった彼らは、一種「理想型」の愛国心を抱えていると見られる。それに対して、20代、30代のサンプルは生活満足度も愛国心得点も比較的低く、特に国のための自己犠牲する意識が希薄であることは特徴といえる。また彼らは「中国」と中国政府を区別して認識している傾向もみられ、愛国心の形成において現実生活の影響が大きいと思われ、「現実型」の愛国心の持ち主であると捉えられる。40代と50代サンプルは中間世代としてその上下世代の特徴を兼有しており、中国人としての自尊感情が最も高かった。また、20代から50代のサンプルに対して、実際の収入金額も一つの要素として分析を加えたが、ある程度の影響が認められた。

文献

市川昭午, 2011, 『愛国心－国家・国民・教育をめぐって』, 学術出版社。吉澤誠一郎, 2003, 『愛国主義の創成－ナショナリズムから近代中国をみる』, 岩波書店。小坂井敏晶, 2002, 『民族という虚構』, 東京大学出版社。